

子供と遊びながら自然を守る

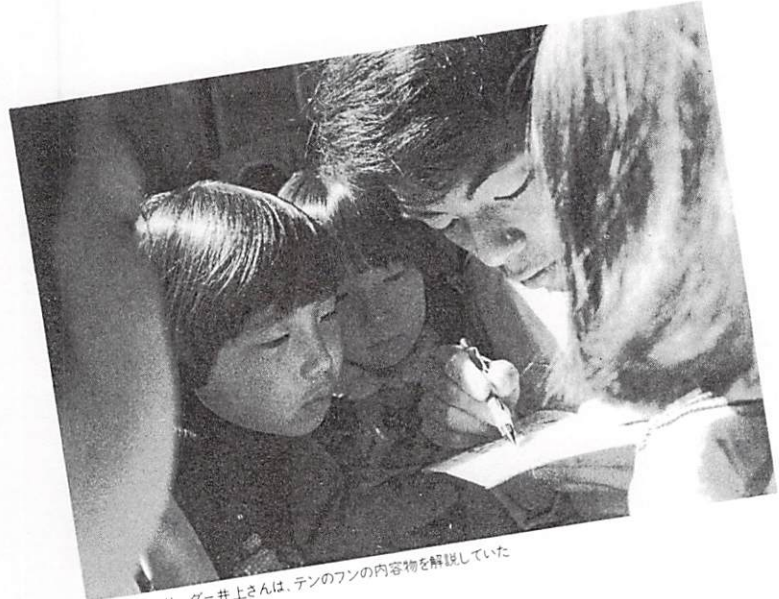
色とりどりのリュックサックを背負った小学生たちが、三台のバスに分乗して山あいの村にゆく。都会の子供たちと自然の中で遊び、自然の素晴らしさを知ってもらおうという、若者たちの活動を見せてもらった。会の名は兵庫県自然教室。二泊三日の「第十四回・美方面自然教室」である。

山村での三日間

三月二十六日の朝、バスは神戸駅前を出発した。約一時間で姫路。そこでまた子供たちを乗せて、北に向かって三時間ほど走った。目的地は兵庫県美方面。美方面は二カ村合併で「町」となり、その

後分離して「町」とは名ばかりの但馬にある山村である。一帯は但馬山岳立自然公園となっている。例年ならまだ雪が残っているそうだが、今年は記録的な暖冬ということもあって、周囲の山に、かろうじて冬の色が残っていた。氷ノ山・後山・那岐山。国定公園の山々である。

美方面につくと、子供たちは、あつというまに散ってしまった。全部で百二十人ほどだが、それにリーダーと呼ばれるボランティアの若者たちが、なんと二十七人もついてきている。単純計算で、子供たち四人半に一人ということになる。実際には、子供たちは学年と性別によって十七の班に分けられていて、それが



地元出身のリーダー井上さんは、テンのフンの内容物を解説していた

宿舎分けにもなっている。各班に一人ないし二人のリーダーがついている。

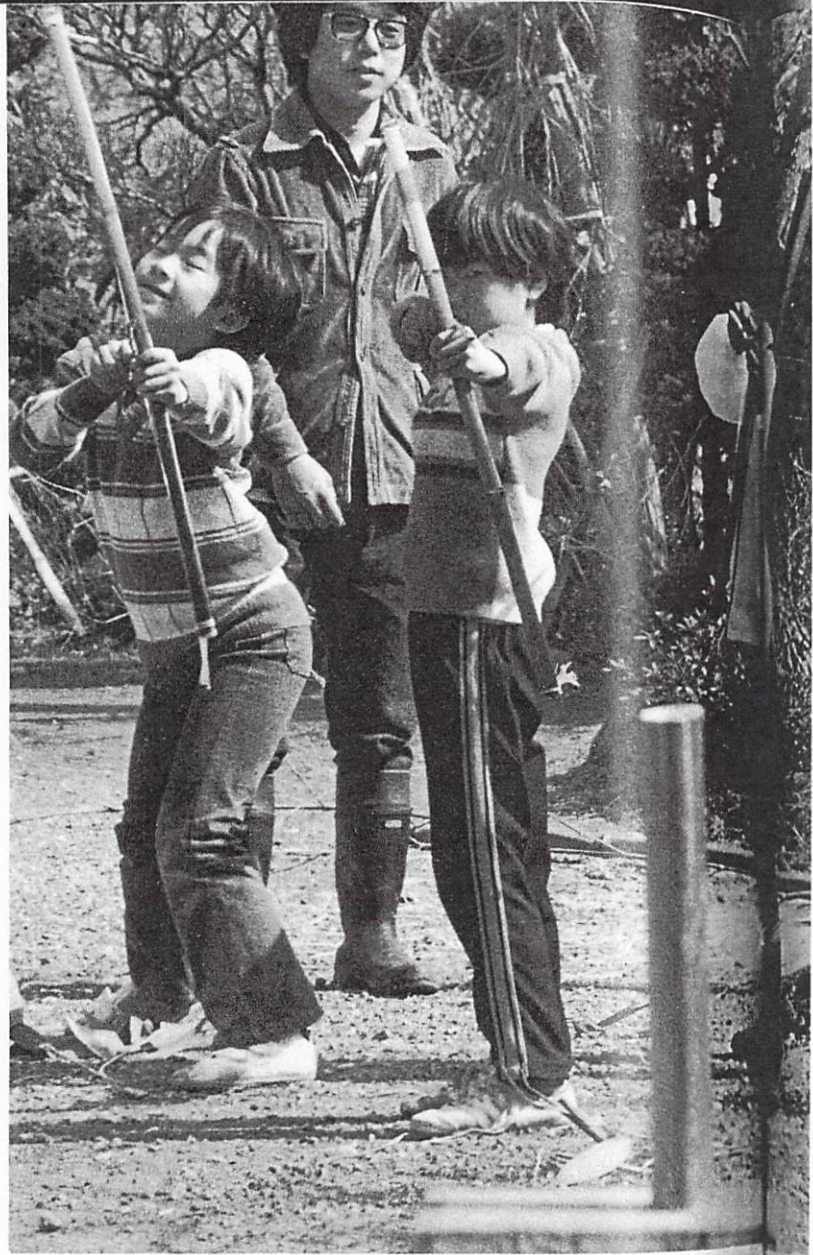
リーダーの大半は大学一年か二年のようで、男女半々。華やかな雰囲気をもし出している。高校時代からすでに三、四年リーダーをやっているという人もいれば、今回初めてで、まだ何も分らないという人もいる。あるいはまた、地元出身のリーダーや、この自然教室で育ったという高校生リーダーもいる。

とにかく、あまりにもリーダーの数が多いため、あらかじめ、マークすべき何人かの名を聞いてあった。しかし、そういう人たちもまた、あつというまに、いなくなってしまう。

しかたなく、私は山田利行さんの班の、七人の子供たちについてゆく。小学校三年の男

少しおけると、水の中にもつくしがたくさん





手製の弓矢で射的に興ずる子供たち、後方は山田リーダー

子ばかりの班である。山田さんは古株リーダーの一人ということで、組織に関する質問や、取材についての相談はこの人に、と指示されていた。私たちは貫田^{なまた}という集落の、田村利雄さんのお宅にお世話になった。

遅い昼食が終って、さていよいよ行動開始かと思っていると、山田さんは庭はずれのササを切って、竹笛を一本作った。子供たちが寄ってくる。すると彼はノコギリ、ハサミ、ナイフを渡して、子供たちに好き勝手に作らせる。これで午後の二時間ほどが過ぎていった。

それから「散歩に出ようか」といって、山田さんは何軒かの家を訪ねてまわった。子供たちは、作りあげた竹笛でブーツ、ビーツと鳴らしながら、ゾロゾロと歩いてゆく。

帰りに、道端にころがっていた一升ビン八本をひろってきた。それを物干し竿につるして、水を入れ、楽器にしようというのである。トライ・アンド・エラーの精神。どうにか音階が出るようになった。ドなしのレミファソラシド。それで初日が終わった。

翌朝、村の道を歩いてみると、板壁の建物に「せみの声」と呼ばれる絵日記が張られ、壁新聞のようになっていた。ワラ半紙一枚ずつに、子供たちがその日のことを自由に書く。それを一枚残らず張り出すという。

「今日、山のぼりをしました。山のぼりのこと、ちゅう、白かわりーダーが、オナラを二はつれんぞくのくさいのがでたので、みんなびつくりした。そして、ちよつと行くと、つくしのたいぐんが、うじやうじやあった。そして

少しおけると、水の中にもつくしがたくさんあった。……」（十三班二年中尾充孝）
「川へ行って水生昆虫を、岩についているのを見つけた。カワゲラ、トビゲラ、タイラムシ、ヤゴなどを見つけた。初めて見る虫が多かった。川へ行って帰ってきて家でゲームをした。ごはんはカレーだった。後で星の話をした！」（八班四年・カワモトなおき）

我が十四班は、翌日は割り竹で弓矢を作るところまでエスカレートし、射的に熱中して午前中を過ぎた。そして午後、また散歩と称して、五、ほど奥の善滝へ出かけた。

他の班が弁当持参でずいぶん遠くまで出かけた。やはり「せみの声」で伝えられたことが、やはり「せみの声」で伝えられた。どうも私は、最悪のリーダーになってしまったようである。三日目の午前中にはトチモチやヨギモチをついた。

八年目の自然教室

その三日間、子供たちが全員集合することはなかったし、リーダーたちのミーティングすらなかった。十七の班は、完全に別個の行動をしたことになる。かなり思い切りのよい運営システムがとられている。

それに、この組織が意外に若いことも知っていた。二十八歳になる山田さんが言い出しっぺであり、けん引役であったという。

九年前、浪人二年目の山田さんは、できたばかりの兵庫県自然保護協会に入会した。「自然」や「保護」にとくべつ関心があったわけではなかったと彼はいう。そして自然観察会に参加する。そこには親子連れも多かったが、見ているとオトナたちはどうしても自然をノスタルジアの対象としてしまう。彼は、子供たちには、自然ともっと直接接触れあうように

しなければいけないと思いはじめた。

大学に入ったころ、朝日新聞にこんな投書がのった。大阪の主婦が近所の子供を実家に連れていったところ、たいへん喜んでくれた。自然がそんなに珍しいのであれば、また連れて行ってやりたい……。

それに応えて、もう一つの投書があった。

もしお望みの方があれば、どうぞ、私の家にもおいでください、という。その投書の主は田村利雄さん。今回泊めていただいた田村さんである。それを読んで、山田さんはさっそく電話をしたという。

その年、一九七一年には、自然保護協会の仲間と計画を立てた。しかし子供たちが集まらなかった。

「わけも分らんと、よその家たずね歩いたりね。行きませんか？なんていうてね。あんなナニモンやノいわれてね」

けっきょく、そのときは、山田さんの中学時代の先生に、ブラスバンドのチームを送りこんでもらった。

「で、それが新聞に派手に出たんですわ。翌年はそのおかげで三十七人集まって、そのときに来た子供の二人が、今回、高校二年ぐらいでリーダーになっている」

第一回目の「美方自然教室」の成功である。翌年（一九七二年九月）からは、子供たちと身近かな自然を見てまわる月一回の例会をはじめた。

八年目を迎えて、いまでは会員六百人、リーダー七十人の大所帯となったが、活動の基本はいささかも変わっていない。

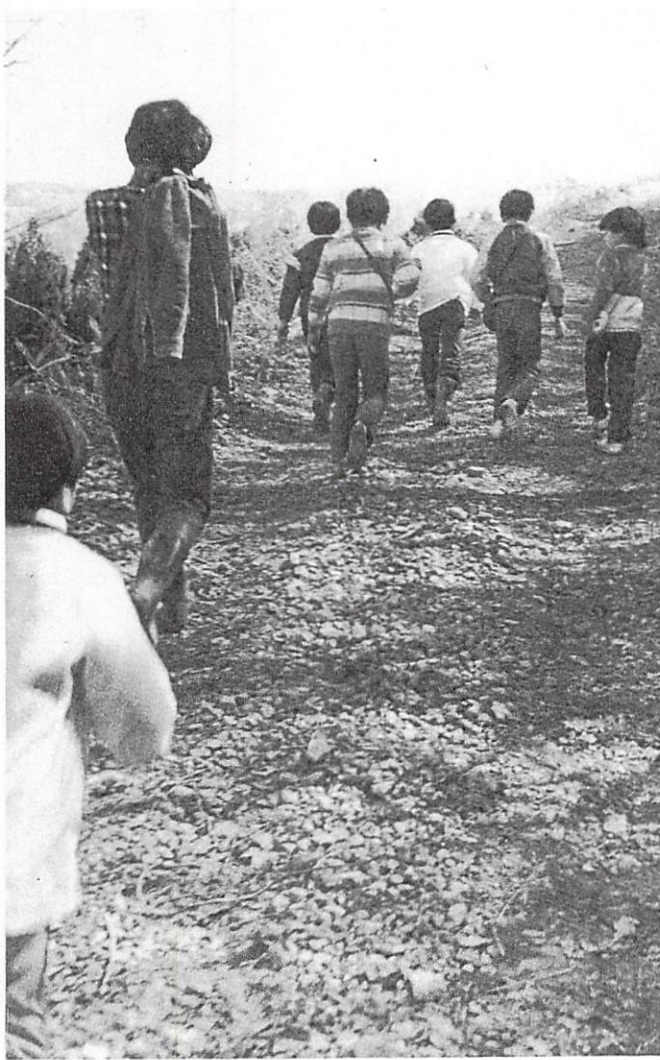
自然教室は九月に始まる。入会金二千元と年会費四千五百円（兄弟姉妹は二千元）で毎月例会に参加できる。例会は阪神・東灘地区の「しんぼんば」から加古川・姫路地区の

ました」（ここにこ・12月17日・子供49人、大人2人、リーダー1人）

善見への散歩道

「つくしんぼ」まで八つの地区に分かれておこなわれている。

「八つの自然教室が寄ったようなものなんですわ。子供たちの行動半径から考えたんですけど、リーダーも、寄ってたかって一つのことをやろうとすると、誰かがお荷物になって



でひと晩の星が見れるんだ」（しんぼんば・12月17日・子供53人、幼児2人、大人3人、リーダー3人）

「とってもあったかな日曜日、六甲山をエッチラ、エッチラとおたふく山まで行きました」（たんぼぼ・12月17日・子供53人、幼児2人

ついてゆくだけになる。だから切り離して自由にやってもらうんです。

ただ、うちの場合には「自然教室新聞」というのがあって、次はどこで何をやりますというのを、全地区いっしょに発表するようになってます。それで全体がコントロールされるかっこうなんですわ」

例会の報告も、絵日記ふうの手書きの文字で「新聞」にのせられる。

「ひと晩中、みんなで星を見たのノプラネタリウムっていうきかいで作る星だと、五十分

い参加するというからすごい。

リーダー2人）

「もみじも半分くらい落ちてしまった市ヶ原に行きました。ヤキイモ用の落葉を大きなぶくろにつめ、やっこの思いで貯水池に着き、オシドリを見ました」（どんぐり・12月10日子供56人、大人6人、リーダー4人）

「なにがゴキブリが三十種もいるってノそれにゴキブリがマンモスより古くから生きてるってが——大阪自然史博物館」（ありんこ・12月10日・子供45人、リーダー7人）

「川シリーズの三回目で加古川の河口に行き

れている。こたぶんにもれず若者の少ない村

月の例会に参加できる。伊予に四万、夏津地区の「しろばな」から加古川・近路地区の

リウムっていうきかいで作る星だと、五十分

「川シリーズの三回目で加古川の河口に行き

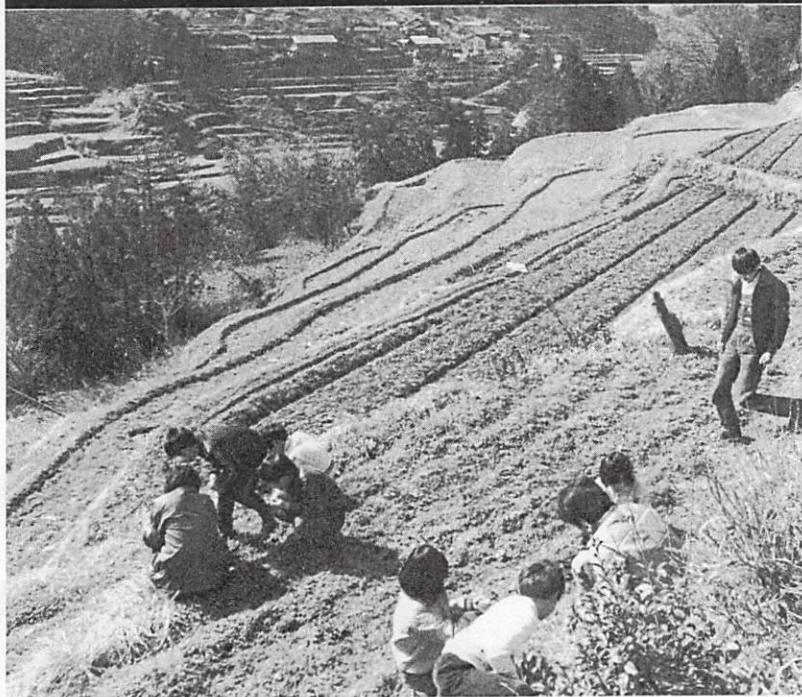
ました」(ここにこ・12月17日・子供49人、大人2人、リーダー4人)

「土がかわらなくなるまでのようすを見学しました」(つくしんぼ・12月17日・子供52人、中学生4人、リーダー6人)

「地図をたよりに、いろんな道から登ったのです。たけとんぼたちは、もうおっこうさんで知らないところはないのです」(たけとんぼ・12月3日・子供48人、リーダー2人)

「水野橋のおくのダムで三班に分かれて、やきいも大会」(のこのこ・12月17日・子供39人・リーダー4人)

こうして秋から冬をすごして、二泊三日の春の「美方自然教室」となる。そして四泊五日の夏の「美方自然教室」で一年間のスケジュールを終えるのである。夏には四百人ぐら



春の田にヨモギをつむ子供たち

い参加するというからすごい。

自然だけが必要なのではない

山田さんは、若いリーダーたちに対して監視の目を光らすといったところがない。自分のチャランポランさを隠すふうもない。それで、この大組織が動いてゆくのだから、たいへんなものである。彼と行動を共にしてきたという四人の仲間について聞いてみた。

代表者としての対外的な顔は、中学で理科を教えている稲尾さん(四七)である。そして組織運営の中心には、県自然課で自然保護を担当している戸田さん(三五)がいる。さらに潤滑油役といった県青少年課の橋本さん(三七)。この人は参加者の女の子を嫁さんにしてしまったイケナイ人でもある。そして、地味だが頼りになる高校の化学の先生工さん(三三)がいる。

さすがに、しかるべき人物が、しかるべき役割を担ってきたという感じがする。そしてリーダーたち。自然教室では高校生でも誰でも(養成講座を受ければ)リーダーにしてしまう。しかも自由にのびのびと、やつてもらおう。

山田さんによると、なまじ指導基準などがあると「評価」ができてきて、けっきょくは子供の方にストレスがたまってしまふ。子供たちが自然の中でどう楽しく遊べたかは、子供たち自身が「せみの声」ではっきりと言っている。だから、一生懸命遊べる人であればいい、という。

子供たちと若者たちの双方に対して、自然教室は機能しているということが言える。そして彼らが自然保護運動へ、人の輪を広げてゆくことになるという図式である。

そして美方の人たちもその輪に加わる。いまでは二十軒以上が子供たちを受け入れてく

れている。「こたぶんにもれず若者の少ない村だから、子供たちは孫のように迎え入れられる。民宿の許可を取らないといけないといった問題も出ているが、泊めてくれる農家をもっともっと増やさなければならぬというのが山田さんたちの考えである。

生活と切り離れた「うつくしい」自然なら、なにも美方だけではない。美方の自然が自然を学ぶのにふさわしい自然だからこそ、それをくり返し、くり返し使うことによって守ろうというのである。そういう運動は同時に、美方の人たちの暮らしに活気を与えることにもつながるというのである。「せみの声」は美方の人たちへの壁新聞でもある。

★

いま、山田さんは新たな方向に一步を踏みだしつつあるようだ。

「自然教室というのは、あくまで自然保護運動の一環であって、子供たち自身の問題に踏みこんでゆく余裕はないわけです。それと、環境としての自然を考えてゆくと、もっと年齢をさげて幼児や赤ん坊まで見てみないと、二年前から、彼は幼稚園児を自然の中に連れだすことを仕事として試みはじめた。そして昨年からは、登校拒否児童や自閉症の子も含めて、子供たちに遊びの場と遊びの仲間を与える「出会い塾」というのを開いている。いわばそれが「職業」で、親がかり、独身、学生気分のみである。

そういう子供たちを連れて、山田さんが美方を訪れるようになると、美方の自然を通してつながった人の輪は、またひとまわり大きくなる。

自然保護運動が、けっきょく、人間の側への運動だということを、私はあらためて考えさせられた。

(ルポ・伊藤 幸司)

~~719-1360~~ 218-1360

GREENPOWER

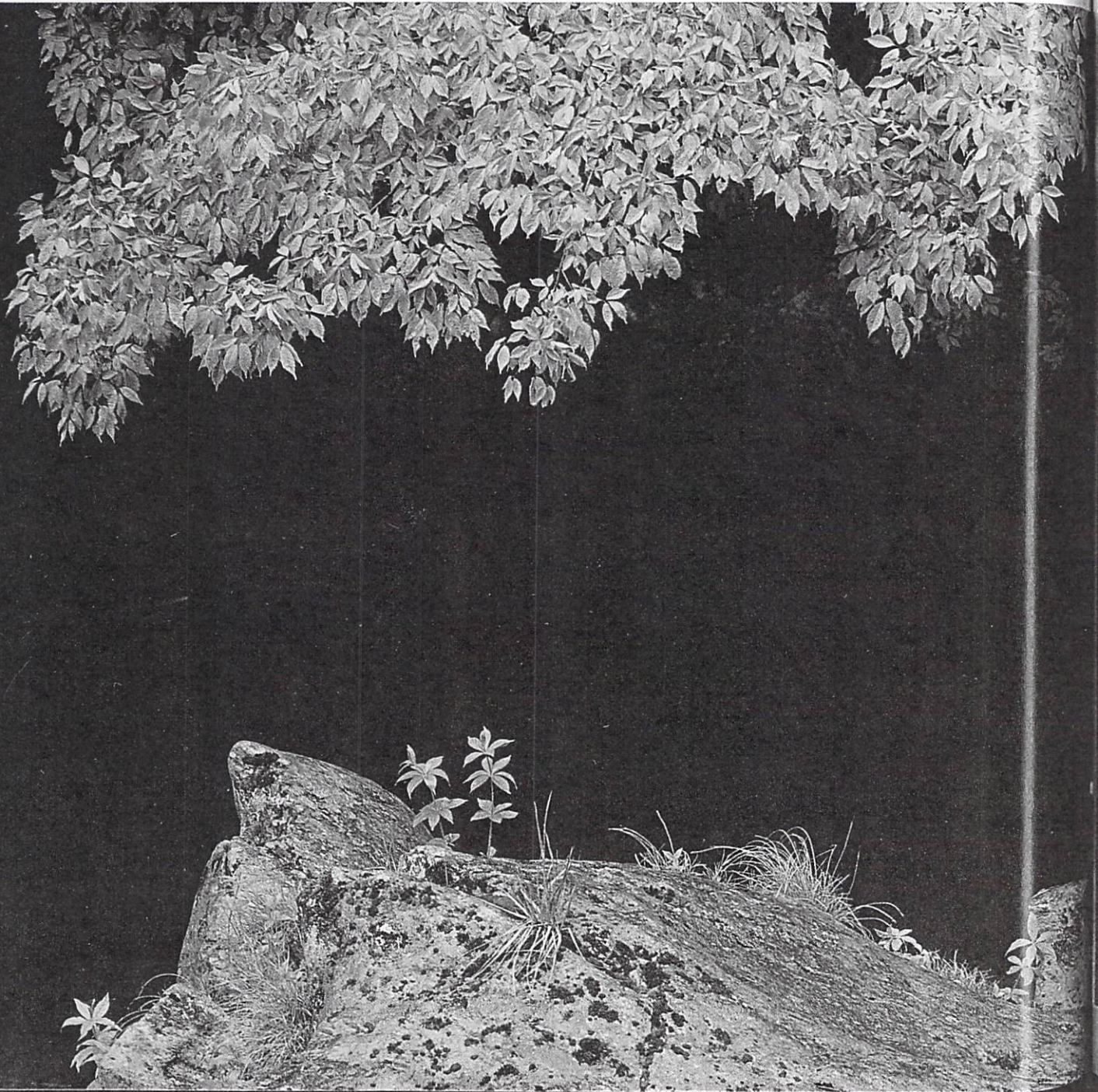
1979 JUNE

昭和54年6月1日発行(毎月1回1日発行)通巻6号

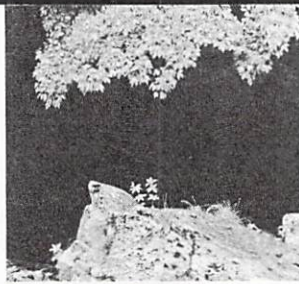
昭和54年2月2日第三種郵便物認可

森林と文化——緑と人間性を求めて

6 グリーン・パワー



光る水辺の梢
水辺に輝く緑の梢にはすでに初夏のきざし。
水源保安林は全国で532万ha、全保安林面積の
74.6%に及び。雨の多いわが国では、水源保
安林の果たす役割は大きい。



表紙撮影／前田真三
表紙デザイン・レイアウト／清水清デザイン室

5 匠

動物めぐり／確井善太郎さん
写真／菅川健次郎

6 世界の緑

緑の万里の長城をめざして
朝日新聞社／吉田 実

10 グリーン創造

「ふるさと森」で一石二鳥
編集部

15 6月の詩

雨の日
詩／立原えりか 写真／原 暁

16 私のひととき

わか雅居家族たがいは7人、60羽
柳 宗民氏

18 木の文化

マダギ雑記
高橋喜平

22 野の博物誌

動物のサイン／花季／蒸・むし・虫
ツナグ／薬草／樹の種・話の種

27 グリーンスポット

生命の讃歌
写真／木原和人

28 森の神秘

捕えるークモ
写真／千国安之輔

31 林業地百景

カラマツ林●北海道

33 グリーンエッセイ

草木と人間
草野心平

34 都市緑化への提言

糸の切れた緑地帯・雑木林
四手井綱英

38 緑の楽園を訪ねて

自然休養林
写真／八木下弘

40 ミニ広場

博物館めぐり／図書紹介/
北から南から

45 ミドリからのメッセージ

国土を守る／林野庁

46 すばらしき仲間たち

子供と遊びながら自然を守る
北から南から

50 インフォメーション

ふるさと朽木／シイラ切り神事
読者からの便り

54 四季の花

尻笥のアジサイ
加藤悦二

編集後記

★先日、友人のあとについて東宮御所と三笠宮邸をお訪ねした。イワツツジが美しかった。根元にキラソウが咲いていた。ふとタンポポをみると、カントウタンポポだった。東宮御所と三笠宮邸は地続きである。ここのタンポポは全部カントウタンポポのようだ。

★翌朝、家の近くのタンポポをみてみた。わたしの家は板橋区の北はずれにある。北に向って歩いた。セイヨウタンポポだった。歩いて15分のところに、この辺では名の知れた観音堂がある。その境内で、カントウタンポポをみつけた。さらに新河岸川の土手に向かった。道端のタンポポはみなカントウタンポポでセイヨウタンポポはない。

★観音堂のまわりをみて回ると、カントウタンポポとセイヨウタンポポが入りまじっていた。

★数年前になるが、新河岸川の土手を志木のあたりまで歩いたことがある。同じ季節であった。タンポポのさかりだった。どこまで行ってもセイヨウタンポポ。カントウタンポポは減びてしまったのか、とさえ思われた。志木の河川敷の公園に着いた時、思わず声をあげた。そこは一面カントウタンポポで、セイヨウタンポポの姿はなかった。そこはまだカントウタンポポの領地であったのだ。

★わたしはひとたびはセイヨウタンポポに領地を追われたカントウタンポポの大逆襲を目のあたりに見る思いがした。わたしの家の近くの観

音堂辺は、まさに両軍の合戦場である。

★そこに血は流れていない。刃を交える金属音もない。

★見た目には平和そのものである。だが、静かな自然のうらに、すさまじい修羅場がかくされているのであった。(S)

★早いもので、本号をもって創刊6号を迎えました。この間、多くの読者からご意見をいただき、次号からは読者の意見を取り入れ、一部企画の変更を考えています。

★本号では、4ページ増とし、木材搬出だけでなく、木曾谷の生活と文化を支えた森林鉄道をしのんで、ささやかな創刊6号記念号としました。(K)

月刊 **グリーン・パワー**

6月号：定価250円(送料別) 年間購読料 3,000円(送料共)

発行日：昭和54年6月1日発行

発行人：白井伝平／編集人：齋藤知克／印刷所：凸版印刷株式会社

発行所：財団法人 森林文化協会

〒100 東京都千代田区有楽町2-6-1 朝日新聞東京本社内
TEL 03-212-0131 (内5324)・213-2854(直通)